

【歴史点描 1】

「播磨国風土記」に宇頭川と記された揖保川の末流に広がる広大な三角州の上で、私たちは命を紡いでいます。

でも初めから三角州が存在したわけではなく、縄文時代網干はまだ海の中でした。

時を経て、海から吹き上げる砂と、川を下る土砂によって生まれた三角州は魚吹神社の故事により網干と名付けられ、令和の今、くらしの拠りどころとして多くの人々が平安の日々を過ごしています。

そんな中、3年4月から「あぼしまち交流館」において「網干歴史講座」が始まりました。

趣旨は多くの出版物が巷にあふれる中、会では一次資料に基づくため、網干が明治から大正へ近代化へと移行する姿を記録した太田覚二郎氏の「備忘録」を選びました。太田覚二郎氏は明治末期から大正・昭和にかけて奥浜村総代をつとめ、その日々を綴っています。総代がこなす憶測なしの村の実務は田畑の管理はもちろん、それに伴う他村との水利権の利害関係は現代にも通じることでしょうし網干町民の氏宮津宮八幡宮とのかかわりは、全町で知恵をしぼった結果が現代にも踏襲されているようです。

貴重な記録を紐解きながら襞に隠れた網干の姿に光を射し込みたいと考えています。